

WURUGA

1. 事業実施の目的

都市に移住したモンゴル族牧民の間で行われている宴に関する調査

2. 実施場所

中国内モンゴル自治区バヤンノール市ウラド中旗海流図鎮

3. 実施期日

2021 年 6 月 22 日 (火) ~ 2021 年 9 月 28 日 (火)

4. 成果報告

●事業の概要

本調査の目的は、中国内モンゴル自治区における国家の生態保護政策によって都市に移住したモンゴル族牧民たちの都市での日常生活に着目し、主に彼らの中で頻繁に行われている宴のあり方や実施状況を把握することであった。

報告者はこれまでの調査を通じて、都市に移住した牧民たちの間で頻繁に行われているさまざまな宴について観察してきた。例えば子供の誕生日宴（十二歳）、結婚宴、お年寄りの長寿宴などが挙げられる。

今回の調査において報告者は主にキーインフォーマントである S 氏と M 氏を中心に、彼らと一緒に 4 つの宴に参加し、それぞれの宴について参与観察し、記録してきた。以下ではその中の S 氏が自分の息子のために行った子供の 12 歳の誕生日宴を事例として紹介する。

キーインフォーマントである S 氏は男性、ウラド中旗 G 鎮 M ガチャー出身の牧民で、2021 年の当時、38 歳であった。彼は 2006 年に国家の生態保護政策で放牧が禁止された後、同年に海流図鎮へ移住した。また、2008 年に妻と離婚したことで、今は息子を連れて生活しているひとり親である。

2021 年 8 月 5 日に S 氏が海流図鎮のレストランで息子の 12 歳の誕生日宴を行った。S 氏が町で予定したレストランの宴会場は舞台と音響設備が整っており、最大 300 人が収容できる施設である。レストランで用いる円形のテーブルは、一卓につき 10 人ぐらい席に着くことができる。S 氏は宴のために最初 20 卓予約したが、当日はそのうちの 18 卓に客が着席し、約 200 人が集まってきた。レストランは一卓あたり 20 品の料理を提供したが、このような一卓の値段は 1058 中国元(約 19,000 日本円)である。



図1 レストランの様子



図2 テーブルの様子と用意した料理

S氏はこの宴に二人の司会者、五人の「アハラクチ」、一人のカメラマンを雇用した。二人の司会者は、一人がモンゴル語で、一人が中国語で司会を進行していく。彼らは宴の内容を指揮する他に、歌を歌い、祝辞を読むこともする。「アハラクチ」とはモンゴル語のリーダーや長老を意味する言葉で、彼らは主に客人を会場へ迎え入れ、主人の親族、同僚、友人を分けて席に座らせ、祝辞を読む、歌を歌うなどの宴の盛り上げ役を務めている。カメラマンは当日の宴の様子を撮影する他に、宴の前のWeb招待状の作成や子供のポスターのデザイン、宴が終了後の写真や動画の編集などの仕事もする。



図3 司会者とアハラクチ

当日、宴を始める約一時間前にS氏と息子のD氏がレストランの入口でモンゴルの民族衣装を着用して客人を待った。本来は18:30時から宴を始める予定だったが、19:20ぐらいに漸く多くの客人が来て、正式に開幕することになった。



図4 S氏と息子さんが客を迎えている様子



図5 レストランの入口で用意した息子さんのポスター

そして司会者の開幕の合図によりレストラン側は料理を少しずつテーブルに出した。宴が開幕した後の式次第は以下のように進化した(表1)。

【表1】 S氏の息子さんの成人宴の式次第(2021年8月)

18:30~19:20	客を迎え入れ、テーブルに着席
19:30~19:40	司会者の挨拶で開幕
19:40~20:00	アハラクチからの挨拶、祝辞
20:00~	主人の入場、挨拶
20:30~	司会者とアハラクチが歌を歌う
21:00~	S氏と息子さんが舞台上で誕生日ケーキをカットする。息子さんの同級生が登場し、彼らからのプレゼントを受け取る
21:30~	S氏が茹でられた羊肉を舞台に出して客に見せる。 アハラクチが茹でられた羊肉に祝辞を読んだ後、各テーブルに配る。S氏と息子が各テーブルを回って客人にお酒を勧める
22:00~	来客が三々五々解散する

以上は、S氏が息子のために行った十二歳の誕生日宴の概況である。

●本事業の実施によって得られた成果

本調査では、都市に移住した牧民の間で頻繁に行われている宴に関して、一連の流れを記録したり、撮影したりすることができた。これにより、牧民の間で行われている宴の特徴を観察することができ、彼らの移住後の生活実態に関する重要なデータを収集することができた。また、博士論文執筆にあたって不可欠なデータを補充することができた。

報告者はこれらのデータを整理し、まとめて、「論文ゼミ」での発表や『総研大文化科学研究』へ投稿を目指す。

●本事業について

本事業により、コロナで中断されていたフィールド調査を続けることができた。また、博士論文執筆に向けた論文ゼミの発表の準備を進めることにもつながり、大変重要な機会を得ることができたことにとっても感謝している。今後もこの事業を継続していただきたいと心から願っている。